

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 4 月 15 日現在

機関番号：14301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2015

課題番号：24660001

研究課題名(和文)分離型里帰り分娩におけるビデオ会話の家族サポートへの効果の検討

研究課題名(英文)The Reality and the Support Systems of Japanese Couples honoring Satogaeri Bunben

研究代表者

古川 亮子 (Ryoko, Furukawa)

京都大学・医学(系)研究科(研究院)・講師

研究者番号：90300095

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：分離型里帰り分娩を行う27組の参加(夫婦・家族サポーターを一組とする)があり、里帰り分娩の期間は平均約98日、里帰り分娩の終了時期の平均は産後約2ヵ月であった。里帰り分娩中の満足度は、非常に満足している・満足している割合は、夫は約81%、妻は約85%、家族サポーターは約93%、次回妊娠時に里帰り分娩を希望するかについては、夫の約70%、妻の約78%が希望しており、家族サポーターの約96%が里帰り分娩を受け入れてもよいと回答していた。ビデオ会話に利用による父子愛着形成や夫婦関係への明確な効果は認められなかった。ただ、夫婦関係と夫婦の会話の満足度には強い相関が認められた。

研究成果の概要(英文)：Twenty seven couples and their family supporters who separated during Satogaeri Bunben participated in this study. The average length of Satogaeri Bunben was about 98 days and the average time to complete Satogaeri Bunben was about two months postpartum. The very satisfied or satisfied rates of Satogaeri Bunben were about 81% of husbands, 85% of wives, and 93% of family supporters. About 70% of husbands, 78% of wives, and 96% of family supporters would like to choose Satogaeri Bunben in next pregnancy.

There were not significant effects of video-mediated communication to couples honoring Satogaeri Bunben in father-infant attachment and a couple's marital relationship. However, the significant strong correlation were found between a marital relationship and couple's communication satisfaction.

研究分野：母性看護学

キーワード：分離型里帰り分娩 父子愛着 夫婦関係 夫婦の会話 ビデオ会話 産後サポート

1. 研究開始当初の背景

里帰り分娩は、300年以上にもわたる日本の出産に関わる伝統であり、社会経済状況の変化にもかかわらず、現在でも約15%前後の妊娠している夫婦が妊娠・出産に関わる援助を実家の両親から受けるために選択していると考えられている。里帰り分娩の功罪は、医学の進歩に伴い、医学的リスクから社会的リスクにシフトされているといわれているが、大賀(2009)が里帰り分娩に関する研究の文献レビュー論文でも指摘しているように、里帰り分娩による父子の愛着形成や夫婦関係といった社会上の問題についての研究はみられていない。また、研究結果に影響を与えるであろう里帰り分娩の定義(妊娠中から夫婦が別々に暮らすのか、産後のみ別々に暮らすのか、夫婦ともに実家で暮らすのかなど)を明確に示している研究が少ないのが現状である。

里帰り分娩で別々に暮らす夫婦へのサポートシステムとしては、古家(1997)が1組の夫婦の症例研究を行って、妊娠中から離れて暮らす夫に胎児心音メールや分娩の疑似体験・育児技術の取得などにより、父性意識の向上や児への愛着向上につながったとしている。本研究者は、日本人が察するなどの非言語的会話を言語的会話以上に重要視する民族であること、新生児は言語的会話が行えないこと、大画面のため一対一だけでなく多人数対多人数であること、ハンドフリー(児を抱いたままでも会話が可能である)、通話費用が安価でだれでも利用可能であることなどから、分離型里帰り分娩で別々に暮らす夫婦へのサポートシステムとしてウェブカメラの効果の検討を、博士課程の卒業研究として妊娠後期から出産後6か月までの症例対象研究をとして行った。結果としては、対象者が4組の夫婦ではあったものの、Mixed Methods(質的データをメインにした質的・量的の混合法)により、里帰り分娩中の夫と妻双方から、里帰り分娩中の配偶者・児への思いを汲み上げられたものの、対象数が少ないことから里帰り分娩の親子愛着と夫婦関係へのビデオ会話の効果について、明確な結論を見出すことはできなかった。里帰り分娩のサポートシステムに関する過去の研究はこの2つのみに限られ、しかも対象数が少ない症例研究にとどまるため、明確なサポートシステムの有効性については明確には示されていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、里帰り分娩で別々に暮らす夫婦または父子の会話に注目し、その会話父子(親子)愛着と夫婦関係へどのように影響するか、分離型里帰り分娩中の利点・問題点の抽出ができ、分離型里帰り分娩に関連した小児虐待/育児放棄やDVの早期発見の必要性を認識することができるか、の2点について検討することである。医学・社会的な

意義として、出産前後の夫婦が別々に暮らすことになる分離型里帰り分娩の問題点として指摘されている父(親)子愛着と夫婦関係の実態について検討し、ビデオ会話がどのように父と母子の会話を向上させ、父親の新生児の理解を促すのみならず、妻(母親)の育児状況や祖父母のサポート状況を理解し、里帰り分娩が終わった後に家族の新生活の構築がスムーズに進むかについて明確にすることができる、父(親)子愛着と夫婦関係によっては、父親の完全な妻と児との分離をビデオ会話による仮想共同空間で阻害することで、里帰り分娩後の小児虐待/育児放棄やDVのリスクを軽減できるのではないかと予想される、里帰り分娩が終了した後も、特に児を抱えて外出が限られやすくなる母の精神的なサポートとして別居している祖父母が児(孫)の養育に関わっていけるよう、ビデオ会話による夫婦・児と祖父母の関係を保持が期待できる、里帰り分娩日記により分離型里帰り分娩中の利点・問題点の抽出ができる、と考えた。

3. 研究の方法

本研究は、所属大学の倫理委員会の承認(京都大学大学院医学研究科・医学部及び医学部附属病院 医の倫理委員会 E1427)を得た後、平成24年7月~平成27年11月まで実施された。研究参加者募集は平成24年7月~平成26年8月まで、分娩施設のある医療機関およびマタニティ情報を提供するウェブサイトおよび地方新聞などの公共媒体にて行われた。研究参加者の包含基準は、結婚している20歳以上の初産婦の日本人夫婦、妻が妊娠中から里帰りのため夫と別々に暮らし週2回以上会えない、妊娠28~35週にあり、お産後1か月までは分離型里帰り分娩を続ける、里帰り分娩先(妻のいる場所)か夫婦の家(夫のいる場所)のどちらかにコンピューターとインターネット環境がある、夫、妻、里帰り先の家族サポーターの3人一組が研究に参加できる、である。除外基準は、研究の問い合わせ時に、周産期合併症のため入院している場合(切迫早産、双胎妊娠、前置胎盤など)、研究の問い合わせ時に、胎児および新生児合併症が疑われている場合(胎児奇形など)、である。

本研究デザインは、Mixed Methods(convergent parallel design)による実験的研究(Basic pretest-prottest design of selected experimental randomized design)かつ縦断研究である。質的データはNVivo 10を用い、記述的分析(descriptive analysis)を行い、量的データはSPSS ver.21を用い、記述統計、t-検定、相関などの分析を行った。

4. 研究成果

1) 里帰り分娩の実際

参加者の概要として、夫の平均年齢は約32歳、妻の平均年齢は約30歳、家族サポータ

一の年齢は約 58 歳であった。家族サポーターは、妻との続柄として約 82%が実母、約 11%が実父、きょうだい(妹、弟)は約 7%だった。夫は全員正職員であり、妻は約 63%が無職(主婦)、家族サポーターは 37%が無職で約 26%が正職員、約 22%が臨時職員であった。全ての夫婦の家族形態は核家族であり、自宅と里帰り分娩先の距離は県外が約 85%、県内が約 15%で、車で距離(時間)とすると平均約 6 時間であった。結婚年数の平均は約 2.6 年であり、計画妊娠の有無では夫は約 78%、妻は約 74%であった。

里帰り分娩の決定者はほとんどが妻であり、他には夫が約 6 割前後挙げられていた。里帰り分娩を選択した主な理由としては、「サポートの問題」と「妻の要因(妻の希望や安心感を求めるなど)」が挙げられていた。

里帰り分娩の期間は平均約 98 日であり、分娩時の夫の立会いは約 48%、里帰り分娩中の夫の訪問は平均約 8 回、里帰り分娩の終了時期の平均は産後約 2 ヶ月であった。

里帰り分娩の満足度を 5 段階評価(非常に満足している・満足している・どちらでもない・満足していない・とても満足していない)で表してもらったところ、非常に満足している・満足している割合は、夫は約 81%、妻は約 85%、家族サポーターは約 93%であった。満足していないは妻と家族サポーターのみに約 4%あった。とても満足していないと回答したものはいなかった。

次回妊娠時に里帰り分娩を希望するかについては、夫の約 70%、妻の約 78%が希望しており、家族サポーターの約 96%が里帰り分娩を受け入れてもよいと回答していた。

2) 里帰り分娩中・後の離れている家族との連絡方法

利用した連絡方法の数・種類・頻度、その理由

里帰り分娩中の産後 1 ヶ月時に夫婦間で主に利用した会話の連絡方法の数は平均約 3.0 であり、携帯電話(スマートフォンなども含む)が約 62%と最も利用されていた。ついて携帯メールは約 57%、ビデオ会話が約 43%であった。里帰り分娩終了後の産後 6 ヶ月および 12 ヶ月で離れている家族(実父母など)との連絡として利用した方法の数は、約 2.5 と 2.6 であった。最も利用されている会話方法としては、産後 1 ヶ月時と同様に携帯電話(スマートフォンなども含む)と携帯メールが全体の約 7-9 割を占めており、ついてビデオ会話が約 3 割強であった。利用した連絡法のうち最も利用した 3 つの連絡方法の頻度をみても、産後 1 ヶ月時の夫婦間での会話は約 5-6 割が毎日利用しており、ついて 2 割前後が 1 週間に 2-3 回程度、約 13%が 1 週間に 1 回の利用をしていた。産後 6-12 ヶ月時での利用頻度をみても、毎日利用が 15-20%前後、1 週間に 2-3 回程度の利用が約 20-27%、1 週間に 1 回が約 16-25%

となっていた。

里帰り分娩中の産後 1 ヶ月時に夫婦間で主に利用した会話の連絡方法の選択理由としては、「容易さ(簡単、気軽、便利)」が最も挙げられており、ついて「会話方法の特徴(顔が見れる、写真が遅れるなど)」、「費用が無料または安価」が挙げられていた。産後 6 ヶ月および 12 ヶ月時の離れている家族との連絡方法の選択理由は、産後 1 ヶ月時と同じく「容易さ(簡単、気軽、便利)」が最も挙げられており、ついて「会話の特徴(写真が見れる)」と「費用が無料または安価」がみられていた。他には「その会話方法しかもっていない(またはもっていない)」もみられた。家族サポーターのみの意見として、「会話方法によって起こる気持ち(声が聞きたい、楽しみ)」などが挙げられていた。

ビデオ会話の経験

参加者 27 組のうち、研究の問い合わせ順にランダムに 14 組を Treatment Group(対象者グループであり里帰り分娩で別々に暮らす夫婦でビデオ会話を利用しながら里帰り分娩中の日記をつけてもらう;以降 TG と略する)、13 組を Control Group(非対象者グループであり里帰り分娩で別々に暮らす夫婦で里帰り分娩中の日記をつけてもらう;以降 CG と略する)に分類した。

TG 夫婦のうち、本研究以前にビデオ会話の経験のあるものは半数おり、その経験期間は 1-5 年以内が 57%、6 ヶ月~1 年以内が 29%、5 年以上が 15%であった。産後 1 ヶ月時のビデオ会話利用の満足度は TG 夫婦のみに尋ねているが、肯定的な意見(非常に満足している・満足している)は約 86%、どちらでもない・満足していないはそれぞれ約 7%であった。里帰り分娩中のビデオ会話の利用状況として、回数は平均約 9 回(分離型里帰り分娩期間中の割合にすると平均 0.09 回/日)、1 回のビデオ会話時間の平均は約 49 分であった。ビデオ会話の相手は配偶者が 100%、ついて児が 42%であり、妻の父母・きょうだいは約 2-5%であった。産後 1 ヶ月時の里帰り分娩後の離れている家族とのビデオ会話の利用継続については約 79%が利用したいと回答しており、その主な理由として「実父母に子ども(孫)の成長を見せてあげたい」という意見が最も多くみられていた。

産後 6 ヶ月時(里帰り分娩後)の離れている家族とのビデオ会話の利用状況については、利用していたのは約 52%であり、頻度としては月に 1 回が約 48%をしめていた。また、毎日との回答も約 10%強みられた。利用する主な理由は主に肯定的な意見と否定的意見に分かれたが、肯定的な意見が否定的な意見よりも多くみられ、「子どもの成長・様子を見せたい・みたい」や「(主に妻の)気晴らし・気分転換になる」があった。否定的な意見としては、「時間(タイミング)をあわせるのが難しい」「子どもの状況に左右される」

などがあった。産後 12 ヶ月時の離れている家族とのビデオ会話の利用状況については、利用していたのは約 38%であり、頻度としては週に 1 回、2 週に 1 回、月に 1 回がそれぞれ 25%を占めており、ついで毎日が約 19%であった。利用しているもののうち、肯定的な意見がほとんどであり、「子どもの成長・様子を見せたい・みたい」、「(主に妻の)気晴らし・気分転換になる」と 6 ヶ月時と同様の意見がみられた。否定的な意見は 1 人のみに聞かれているが、「ビデオをつなぐのが手間」や「他の会話方法を使うことが多い」などであった。

産後 12 ヶ月以降も離れている家族とビデオ会話を継続するかについては、約 67%が利用したいと答えており、その理由としては「子どもの成長・様子を見せたい・みたい」、「(お互いの)顔が見れる」、「(妻の)ストレス解消になる」などがあった。一人のみの意見であるが、「子供が祖父母の顔を忘れないようにする」や「子どもも喜んでいる」などもみられていた。利用しないと回答したもの(約 26%)の意見としては、「他の会話方法を利用する」、「特に必要としない」があった。

里帰り分娩中・後の夫婦におけるビデオ会話利用の効果

はじめに、父子愛着形成と里帰り分娩中のビデオ会話利用の効果についてみる。縦断的に妊娠中の里帰り分娩開始時(または研究参加時)、産後 1 ヶ月時、産後 6 ヶ月時、産後 12 ヶ月時の父親の対児感情において TG と CG の間には違いはみられなかった。CG は TG に比べ、里帰り分娩中の夫の訪問回数が有意に多かったこともあってか、産後 1 ヶ月時の対児感情に両群の違いがみられなかった可能性がある。しかし日記による TG の夫の意見をみると、ビデオ会話をを用いることで、音声だけではなく視覚情報を得ることが出来るため、言語的会話をすることが出来ない児の生活や成長の状態を理解し、妻との育児経験の共有を仮想共同空間(virtual co-presence)によって行うことが出来ていた。横断的にみると、TG は産後 1 ヶ月と 6 ヶ月、CG は産後 6 ヶ月と 12 ヶ月の対児感情のうち接近感情について有意に違いがみられた。TG に注目してみると、産後 6 ヶ月時の接近感情は産後 1 ヶ月時に比べると有意に高くなっており、やはり現実に見る生活をする中でより児との親密感が湧き、愛着が促されていることが分かった。

つぎに、夫婦関係と夫婦の会話の満足度から里帰り分娩中のビデオ会話利用の効果を見る。両群において、夫婦関係と夫婦の会話の満足度には有意に比較的強い～強い相関が認められた。縦断的には妊娠中の里帰り分娩開始時(または研究参加時)、産後 1 ヶ月時、産後 6 ヶ月時、産後 12 ヶ月時の夫婦関係と夫婦の会話の満足度において、TG と CG の間には違いはみられなかった。夫婦関係

と産後 1 ヶ月時の夫婦の会話方法の数または里帰り分娩中の夫の訪問割合は CG グループでは有意に比較的強い相関が認められていた。横断的には、両群とも産後 1 ヶ月時の夫婦の言語的な会話の満足度は産後 6 ヶ月時よりも有意に高かった。また、TG のみでは産後 1 ヶ月時の会話の満足度は産後 6 ヶ月時よりも有意に高く、非言語的会話の満足度では産後 12 ヶ月時は産後 6 ヶ月時よりも有意に高かった。夫婦関係のうち相手を思いやる側面では、TG のみ妊娠中と産後 1 ヶ月時、産後 1 ヶ月時と産後 6 ヶ月時に有意な差がみられた。CG では相手をコントロールする側面において産後 1 ヶ月時と産後 6 ヶ月時に有意な差がみられた。里帰り分娩中の日記における夫婦の会話についての記述をみると、TG はビデオ会話についての記述が最も多く、CG では携帯電話(スマートフォンを含む)が最も多かった。また、両群ともに次に多い記述は夫の訪問に関してであった。ビデオ会話の記述では、主に 4 つの記述(肯定的な意見、否定的な意見、ビデオ会話によって生じる思い、カメラ・インターネットの状況)に分けられた。最も多い記述は肯定的意見であり、そのなかでも「お互いの顔が見える」、「経験を共有できる」、「書類や自宅の環境を確認することが出来る」、「動く児を見ることが出来る」といった視覚的情報が得られることによる意見が最も多かった。TG は本研究の目的としてビデオ会話の情報および環境を提供されていたためか、音声のみや停止画面に比べより質の高い会話環境(特に動画といった視覚情報)を手に入れることができていたことを読み取ることが出来た。それに比べ、CG は自らでより良い会話方法を検索したり、または夫が訪問したりといった工夫を行っており、縦断的な量的データでは両群間における量的な違いがみられなかった一因であるかと考えられる。また、横断的な量的分析では、従来から懸念されている里帰り分娩後の夫婦関係のリスクが明らかとなった。里帰り分娩中(産後 1 ヶ月時)と里帰り分娩後(産後 6 ヶ月時)を比較すると、両群ともに夫婦が共に暮らしている産後 6 ヶ月時の方が夫婦の会話の満足度や夫婦関係で相手を思いやる側面が低くなっている。里帰り分娩に限らず、遠距離恋愛にあるカップル(夫婦も同様)でも一緒に過ごすことになった場合に危機的な状況におかれるといわれており、本研究の夫婦においても同様みられている。しかし、分離型里帰り分娩の夫婦の場合は、遠距離恋愛のカップルよりもさらに新しい家族構成および役割獲得への不安やストレスが加わることで、危機的状況を招きやすくなるのではないかと示唆された。

3) 里帰り分娩中・後の夫婦のサポート状況
里帰り分娩開始時に産後に期待するサポート数の平均は約 5.1 であり、サポートの種類では実母が約 93%、配偶者が約 76%、実

父が約 72%であった。里帰り分娩終了後の産後 6 ヶ月における利用しているサポートの数は平均約 6.1 で、配偶者が約 96%と最も多く、ついで実母(妻の母)が約 59%、夫の母が約 46%であった。産後 6 ヶ月時に希望するサポートとして挙げられていたものは、「託児施設などの育児に関する施設・場」が最も多く、ついで「特にない」、「行政機関からのサポート」、「各種のサービス」であった。産後 12 ヶ月における利用しているサポートの数は平均約 3.8 で、配偶者が約 98%と最も多く、ついで実母(妻の母)が約 59%、実父(妻の夫)が約 43%であった。産後 12 ヶ月時に希望するサポートとして挙げられていたものは、産後 6 ヶ月時と同様に「託児施設などの育児に関する施設・場」が最も多く、ついで「助産師、ベビーシッター、両親などのサポートしてくれる人」、「行政機関からのサポート」、「各種のサービス」であった。

里帰り分娩中の夫婦へのサポートとして希望することについて、夫婦では「里帰り分娩中の会話方法」を最も挙げており、家族サポーターは「夫婦への配慮」「妻(娘)への配慮」を最も挙げていた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

Furukawa, R., & Driessnack, M. (in press). *Testing the Committee Approach to Translating Measures Across Cultures: Translating the Primary Communication Inventory from English to Japanese*. Nursing & Health Sciences.

〔学会発表〕(計 2 件)

Furukawa, R., & Driessnack, M. (2015, July). *Moving Beyond Back Translation - Using the Committee Approach to Create the Japanese Version of the Primary Communication Inventory (PCI)*. The ICM Asia Pacific Regional Conference 2015, Yokohama, Japan.

Furukawa, R., & Driessnack, M. (2015, September). *The Impact of a Video-Mediated Communication Intervention on Couples' Communication Satisfaction while Separated during Satogeri Bunben*. MMIRA Asia Regional Conference 2015, Osaka, Japan.

6. 研究組織

(1)研究代表者

古川 亮子 (FURUKAWA, Ryoko)

京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻・講師

研究者番号：90300095